
卒業式の、その後。

ユキジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

卒業式の、その後。

【NZコード】

N1242E

【作者名】

コキジ

【あらすじ】

私は今日、中学校を卒業した。高校への不安を持ちながら、友人たちと最後の中学校生活を過ごす。

今日、私たちは中学校を卒業した。

卒業式を無事に終えて、私たちは教室に戻つて担任の話を聞いたり記念撮影したりと何かと忙しく時間を過ごし、最後はみんなで泣きながら教室を出た。これでもう、この教室に来ることはないのだろう。そう思うと、少し寂しい。

その後は校舎の玄関を出て、もう一度思い出しに記念撮影。今度は違うクラスの子や後輩も入つて結構混雑している。

記念撮影もほどほどにして、友達がある提案をした。

「卒業式なんだから、告白する人も多いはず！面白そうだから見に行こうぜ！」

それを聞くなり、「それいいね！」「青春だねー！」「せついえば隣のクラスの子が今日告白するって気合入れてたよー」「よし、ターゲットはそいつだーとなると、告白といえれば校舎裏でしょ！」

と、いつことで。さつきまでの涙はどこへやら、まだまだ好奇心旺盛な私たちは、人だかりの場を出て校舎裏に行くことになつた。

「うわーついるよ！ほんとにいるー！」

校舎裏を覗いた誰かがこそこそと報告。うわ、本当にいるとは思わなかつた。

しかし騒いでる私たちに気がついて、男子の方がこちらを睨む。

私たちはあわててその場から逃走した。

ダッシュで走つたので息も切れてきて、みんなでそひぐんにあつた花壇に座り込む。

「バレちゃつたねー。せつかく告白してたのに、悪いことしちゃつたかな？」

「あんだけ騒げば普通にバレるだろーまあ、中学生最後だし、い

いんじやない？」

「いやあ、でも青春だつたねえ。あー私も告白されたいー」

「じゃあ私が告白してあげよつ。好きだ!!付き合つてくださいー！」

「よろこでー！」

ふざけて告白じつことかして、お腹が痛くなるまで笑いまくつた。そんな姿を見ていると、いつもやつてみんなで笑えるのも今日が最後だなんて思えなかつた。いつもの教室の風景。今思い出しても、馬鹿やつてたなあつて笑えてくる。

「あ、そうだ！」

ここでまた、友達の一人が何かを思いついたらしい。悪戯つ子の表情で、

「探検じつじょづー！」

と叫んだ。

もちろん、内容を聞くまでもなくみんな賛成である。

どうやら探検じつことは、先生に見つからないように校舎をじつそり探検するところのもの。まあ、名のとうりだね。

でも、最後に校舎をじつくり見ておくのもいいかもしれない。みんなもそう思ったのか、すごく乗り気だ。

まずは教室に行くことになつた。入学したてで、まだ何も分らなかつた私たちがいた、一年生のときの教室。1年組、という前列腺が入り口前についていた。

「あのころは私らも若かつたよねえ」

なんて年寄りくさいこと言いながら、校舎をまわつていく。教室の中へはさすがに入れないでの、少し見るだけである。

クラス対抗の合唱コンクールに向けて、必死に練習した音楽室。みんな必死で、けれどなかなかクラス全体がまとまらなくて、クラス内がちょっとぴりぴりしていた。でも最後は、優勝はできなかつたけれど満足する合唱ができた。

次に、美術室。変なもんばつか描いて、これは傑作だ!とか言い

ながら遊んではかりいた。みんな、すつゝく絵上手いんだもんな。

家庭科室ではお菓子を作つて、食べすぎてお皿の弁当が食べられなかつたこともあつた。

他にもパソコン室やら体育館やら、思ひ出のたくさん詰まつた場所へ行つた。私たちは先生に見つかってはいけないというルールなど忘れて、職員室へも行つた。やつぱり怒られたけど、先生もなんだか嬉しそうだつた。最後に、今までお世話になつた先生に挨拶をして、探検ごっこが終わつた。なかなか楽しかつた。

その後も飽きることなくみんなで思い出話をしてから、昼になつてお腹もすいたといつことで、よつやく帰ることになつた。

「じゃ、またどつかで会おうねー」「たまにはメールしてね！」
帰る方向が違う子たちとは先に分かれて、残つた子たちでまたたくさん話をした。

「私たち、みんな高校分かれちゃつたじゃん。また会えるんかねえ？」

「あー、これから先、連絡とれなくなる子もいるかもね・・・」
さつきまでの楽しかつた時間から、急に現実に戻された気がした。みんな自分の将来に向けて、自分の進路を決めていく。だから当然、進む高校も違うのだ。みんな自分の夢を持つて、少しずつそれに向かつている。けれど私はまだ将来なんて考えてなくて、高校を卒業してからも大学へ行くのか、それとも就職するのか、将来自分が何をしているかも想像することができないのだ。

それを[冗談っぽく友達に言つてみた。意外にも真剣に答えてくれた。]

「自分が何してるかなんて、分るわけないよ。まだ高校に入学もしてないんだよ？卒業してからなんて、ゆっくり考えていけばいい。ま、一度しかない高校生活を楽しめないとね。深く考えすぎ。もつと気楽に行きなつて」

そう語る友達は、今まで私が見たこともない表情だつた。しつかり自分の意思を持つていて、かつこよかつた。私は悩んでる自分

が可笑しくなつて、自然に笑つてた。友達はさつき言つた言葉がなんだか恥ずかしかつたのか、冗談をいくつか言つて笑つた。

「 そうだよね。うん。少しずつ、決めていけばいいか。」

私はこんなに頼もしい友達を持つているのだ。きっと大丈夫。悩んだときは、また相談にのつてもらつて、嫌なことがあつたときは励ましてもらおう。悩むなんて、私らしくないんだ。

「 何にやけてんのさ。あ、じゃあ私、家こっちだから。ばいばい」

別れを告げて、私も早く家に帰ることにした。友達がいなくなると、急に寂しくなつた。でも、さつきまで馬鹿みたいに騒いでたら、これからもう一度と会えないとか思えないよなあ、と思いつ笑いしてしまつた。

私は高校生になつた自分を想像してみた。周りが知らない人だけで、おろおろしていて、いろいろ不安だらけだらう。

今もすごく不安だ。実は卒業式中、みんなと離れることが怖くて、私は卒業を祝うことことができなかつた。友達や先生におめでとうと言われて、悲しかつた。

でも今は、心から自分と友達の卒業を祝つて、将来に向かつて頑張つていこうと思える気がした。

携帯電話を取り出して、新規メール作成の画面を開く。宛先は、今まで私を支えてくれた友達に。題名は、いつもみたいな気安さで適当に。本文は、寂しさとかを悟られたくなくて精一杯に絵文字で飾つた。文章を打ち終わると、送信ボタンを押す。

私は送信完了の表示を確認して、携帯電話を閉じた。

R e : あ、そういうれば言い忘れてた

› 卒業おめでとう！！

中学校生活すつごい楽しかつたよー！高校生になつても、また

遊ぼうね！私も高校生頑張るよ

今までホントに、あつがとう…！

(後書き)

卒業式をテーマに書いてみました（時期はズレてね？）。相変わらず文章めちゃくちゃですが、笑つて誤魔化してやってください。もつと感動できる文章とか書ければいいんですけど・・・力不足でして・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1242e/>

卒業式の、その後。

2011年1月15日22時23分発行